

付 録 2

主要概念の定義と説明

付録2 主要概念の定義と説明

以下では、本研究において、特に重要かつ頻出する概念である、「ジェンダー」「女子・女性」「エスニシティ」「性役割」「性差別・ジェンダー平等・ジェンダー公正」「教育開発」「(女性の)エンパワーメント」「進路選択、進路形成」「慣習法・イスラーム法、習慣・慣習・伝統」などの概念について定義および説明する。

ジェンダー (jantina・gender/gender)

ジェンダーは、一般的に「女性存在と男性存在の生物学的側面を指すセックス (sex) と区別され、男性と女性の違いの社会・文化的側面を意味する概念である」[中西 1998; 木村 1999]¹。ただし、80年代後半以降、ジェンダー研究やフェミニズム理論において、セックスとジェンダーの違いを慎重に論じる研究も登場してきた[フェミニズム理論辞典 1999, pp. 122-24]。たとえば、ジョーン・W・スコットは、「ジェンダーとは、生物学的な性をもった身体のうえに押しつけられた社会的カテゴリー」[スコット 1992, p. 60]であり、生物学的な性 (セックス) と社会的な性 (ジェンダー) の区別を容認すると、ことさらに男女の性差を強調してしまう点に警鐘を鳴らしている²。しかしながら、本研究では、男女の性差や性役割観に比較的厳格であるイスラーム文化圏を対象とするため、ジェンダーを「男性と女性の社会・文化的側面を意味する概念」として定義づけ用いることとする。

女子 (gadis/girl)・女性 (wanita・perempuan/woman, female)

ジェンダー研究において、「女子」という概念が、かつて用いられた「おんな・こども」に相当する侮蔑的な表現であるとの認識から、女子教育を用いず「女性教育」「女性大学」と呼ぶ先駆的な実践や研究が増えてきた。しかし、本研究の対象となる青年期という時期が、女子から女性へという呼称が変化する移行期にあたっており、対象の年齢的な差異を明らかにする必要がある。そのため、中等学校までの学齢期では「女子 (gadis/girl)」、中等学校を卒業した時点から「女性 (wanita・perempuan/woman, female)」と区別して用いることとする³。国際機関の各種文書では、girls' education (女子教育) と women's education (女性教育) とが区別されていることから、「女子」と「女性」とを分けて用いることには意義があると思われる。また、「女子教育」や「女性教育」という概念は、女

性の特性や性役割を尊重した上で、特有の教育の理論や実践が必要であることを想起させる。それゆえ、本研究において、特に「女性と教育」と記載する際には、それらにとらわれず、女性に対する教育全般を指し示すこととする。

エスニシティ (Bangsa/Ethnicity)

人種 (race) は遺伝的差異を表す概念であるのに対して、エスニシティは、文化的差異を表現する概念である [International Encyclopedia of Education 1994]。梶田 (1996) は、エスニシティを「言語・民族・人種・文化などの客観的属性を共有することに加え、主観的な帰属意識の共有を含め」る概念として規定し、エスニック集団 (a ethnic group) を、「客観的属性と主観的な帰属意識を共有する集団である」と定義している [梶田 1996, p. 8]。本研究では、既存のエスニック集団の分類が、生徒の進路の幅を固定化し、女性の多様性を描くことを難しくするという問題性を指摘しようとするため、上記の定義に従い、マレー人、華人、インド人というマレーシアで一般的に用いられるエスニック集団の分類を踏襲することとする。

性役割 (tanggungjawab jantina/sex role・gender role)

「性役割 (sex role)」という概念は、「生物学的性を根拠に男女に割り振られた社会的役割」を意味する。そして、「生物学的性差を基準とした性役割に価値付けがされ、その価値の高低が上下関係をもたらすことで、高い価値が付与された役割 (主として経済的報酬を伴う生産活動や、方針決定を行う政治活動) を担う男性に、低い価値を付与された役割を担う女性が支配されるパターンが成立することを性差の社会的意味」とされ、そのような役割が「性役割・ジェンダー役割 (gender role)」と呼称される [目黒 2002]。

さらに、「男はそと、女はうち」という言葉に象徴される性役割は、それが自明視され強制された場合に「固定的 (伝統的) 性役割観」と呼ばれることが多い。固定的性役割観は、単に生物学的性を根拠として男女に振り分けられる社会的役割という意味だけではなく、それが社会的・文化的規範によって強制される意味合いが盛り込まれると考えられる。また、これまで、固定的性役割観よりも伝統的性役割観という概念が頻繁に用いられてきたが、伝統という概念そのものが論争をはらむ概念であるため、本研究では固定的性役割観という用語を用いることとする。なお、「性別役割分業観」は性役割観の狭義の概念である [フェミニズム理論辞典 1999, pp. 295-298]。

性差別 (diskriminasi jantina/sex discrimination・gender discrimination・sexism)・ジェンダー平等 (gender equality)・ジェンダー公正(gender equity・gender parity)

女性学やジェンダー論において、公正 (equity) という概念と平等 (equaity) という概念は区別して用いられる。教育分野における男女間の平等を表す概念も同様に区別されており、殊に国際女子教育開発の文脈で、教育の男女間格差の解消と、教育のジェンダー平等の達成は分けて考えられる。前者は、「ジェンダー公正 (gender equity・gender parity)」、後者は「ジェンダー平等 (gender equality)」という概念によって説明される。

UNESCOによると、ジェンダー公正とは、「初等・中等教育において、男子と女子の平等な就学を達成する」という量の問題を示す概念である一方、ジェンダー平等とは、「男子と女子の間の教育的平等を確保する」という質の問題を示す概念である [UNESCO 2003, p. 285]。一般的に、ジェンダー公正は、就学率などで表される量の問題を指し、ジェンダー平等は教育内容などに関わる教育の質の問題を表す。そして、量を示す指標として、成人識字率や初等・中等教育段階の就学率が用いられ、質を示す指標として、初等・中等教育段階の終了率・修了率、中退率、学業達成度などが用いられる。一般的に、ジェンダー不均衡 (gender imbalance・gender disparity) を解消し男女間格差を改善するよりも、性差別 (gender discrimination) を克服しジェンダー平等社会を実現することの方が困難であると考えられる。

教育開発 (Pembangunan dan Pendidikan/education for development, educational development, education and development)

黒田・横関編 (2005) によると、教育開発には、「開発のための教育 (education for development)」、「教育の開発・発展 (educational development)」、「教育と開発 (education and development)」という 3 つの見方がある。「開発のための教育」は、「途上国の社会経済開発の基盤・手段としての教育、開発に資する教育という認識であり、開発の側から教育を見た見方」である。次に、「教育の開発・発展」は、「教育自身に独立的な価値を見出し、教育機会の拡大や教育の質の向上を開発の目的・過程・結果と捉える考え方であり、教育の側から開発を見た見方」である。最後に、「教育と開発」は、「教育と開発の正の相関を所与とせず、その両者の負の相関をも含めた関係性を客観的に見る見方」である [黒田・横関編 2005, p. i]。本研究においては、マレーシアの社会変動という「開発のための

教育」の見方と、青年期女性の進路形成という教育を受ける主体から「教育の開発・発展」を見る見方の両方について論じる。

(女性の) エンパワーメント (keperkasaan/empowerment)

エンパワーメントという概念は、1980年の第2回国連世界女性会議の頃から、第三世界の女性たちによって用いられ始め、開発戦略の新しいアプローチである「エンパワーメント・アプローチ」として広く知られるようになった。さらに、1985年に女性および女性グループからなるゆるやかな団体DAWN (Development Alternatives with Women for a New Era) が表明した意見の中でエンパワーメントという概念が用いられたことが、その用語の普及に拍車をかけたとされる⁴。

昨今、日本でも一般的に利用されつつあり、国立国語研究所が発表した第2回外来語委員会の言い換え提案(2003年11月13日)では、「本来持っている能力を引き出し、社会的な権限を与えること」という意味として規定され、「能力開化」「権限付与」という日本語訳が当てられている。

本研究においては、エンパワーメントは、他者に対する支配というよりも、自立や内なる力を高めるための女性の能力を意味しており、男性に対する女性の地位を高めることをことさら強調しているわけではないことに留意し、エンパワーメントを「(女性が)人間として持つ潜在的な能力や可能性が主体的に開花され、かつ客観的にも評価されること」定義する。

進路選択 (pemilihan kerjaya/career choice)

進路形成 (pembangunan kerjaya/career development)

教育社会学において、キャリア (career) は「個人が職業上たどっていく経歴。職業経歴」[新教育社会学辞典 1986, p. 268]と定義付けられることから、キャリアは職業的側面に重きを置いて論じられる傾向が強い。しかしながら、昨今キャリアという概念に、職業的側面だけでなく、多様な意味合いを含ませようとする新しい研究動向も見られる。本研究では、主として学齢期の生徒を対象とするため進路という概念を用いるが、新しい研究動向にも鑑み、職業的な意味合いだけではなくより広義な意味を内包させることとする。

加えて、「進路選択」と「進路形成」という2つの概念を区別して用いる。進路選択は、初等教育から前期中等教育へ、後期中等教育から中等後教育そして高等教育へと、人生の

ある一時点の選択に着目する場合に用いる一方、進路形成という概念は、人生の継続した営みの中で進路選択をとらえる場合に用いる。また、進路形成は、長いライフ・コースで、自身の結婚観や家族観や職業観を考慮した上で、女性が進路を選択していく過程でもある⁵。

慣習法・イスラーム法 (adat dan syariah / custom and Islamic law)

習慣・慣習 (adat / custom)

現代マレーシアにおいては、シャーリアを基本理念とする伝統的なイスラーム法体系、国家が制定する行政法に加えて、地域社会に固有の慣習という各々性格が異なる法規が存在する。特に、マレー語のアダット (adat) は、ある集団・社会の習慣・慣習を表す⁶。そして、「慣習は時代や地域に応じて変化しうるものであり、理論上、独立の法源とみなされることはなかったが、イスラーム法の形成ないし適用に際しては、少なからぬ影響を及ぼした」[岩波イスラーム辞典 2002, pp. 297-98] とされる。本研究では、マレー社会のアダットが有する母系的側面が、イスラームと融合（時に葛藤）しながら、地域社会の文化的な意味体系の中で、マレー社会独特のジェンダー関係を生成したと仮定して論を進める。

註

- 1 女性の進路分化の問題を扱った中西 (1998) は、『『セックス』のように一枚岩ではない『性』、すなわち近年の価値観の流動化が引き起こした、『多様な性役割観』に基づく女性内分化を生み出すメカニズム』が存在するとした。
- 2 ジェンダーの「まえ」に生物学的性差が厳然としてあるために、ジェンダーやジェンダーによる性差を自明のものと規定することとなったとされる[バトラー 1990/1999]。
- 3 青年期 (dewasa/adolescence) は、「およそ 12,3 才ごろから 22,3 才ごろまでの時期」と規定され、「子どもからおとなへの過渡期」と定義される[教育心理学新辞典、1969 年]。一方、「青年期」は「思春期の身体発達と性的成熟の開始から、大人としての心理的社会的成熟に達するまでの時期。およそ中学生から大学生に相当する年代」と規定され、その基本的特徴として「身体の急激な発達と性的機能の成熟、論理的思考の発達、社会的関心の拡大深化、自我のめざめと人生観の形成など」が挙げられる[多項目 教育心理学辞典、1986 年]。また、青年期は、前・中・後期の 3 区分に分けられる場合と、前・後期の 2 区分に分けられる場合がある。これらどの定義にしたがっても、本研究の対象となる、後期中等学校から中等後教育、高等教育は 17 歳以降であり、おおよそ青年後期に位置づけられる。マレー語の dewasa は、日本語で成人や大人と訳されるが、マレーシアの国語辞典によると「21 歳以上で十分に大きい」場合に用いられる [Kamus dewan, 2002 年]。それゆえ、必ずしも日本語でいう青年期をカヴァーした単語ではない。
- 4 マレー語のエンパワーメントである「keperkaasaan」は、「力をつける (berkuasa, hebat, kuat など)」を意味する動詞が名詞化されたものであり、最近マレーシアのマスメディアにおいても用いられている。たとえば、マレーシアの通信会社 Bernama 通信が配信するニュース、「Puteri Umno Sambut Baik Cadangan Tubuh Pusat Gender NAM」(2005

年5月11日)で使用されていた。

- 5 進路選択、進路形成という概念に加えて、より長い期間の中で、進路を形成していく意味を示す「生涯設計」という概念もある。家族社会学を専門とし、日本政府の開発とジェンダーや男女共同参画の取り組みの代表的論者である目黒(2002)の説明によると、「ライフ・サイクル (life cycle)」が人間の発達段階とそれに添ったパターンを重視するのに対して、「ライフ・コース (life course)」は、年齢別の役割や人生の出来事を経て個人が歩む軌跡を指す。しかしながら、「サイクル」や「コース」という概念よりも、日本語の生涯という概念には、「①この世に生きている間。一生の間。終身。終生。②一生のある部分 [広辞苑第5版、1998年]」という、より長い期間と広がりのある意味が含まれると考える。また、日本語の「生涯」にあたる、マレーシア語・インドネシア語の「seumur hidup」(「生きている (hidup) 間中 (seumur)」) も、長い期間を想定できる概念である。たとえば一生の仕事と言う場合、仕事を表す pekerjaan と合わせて、pekerjaan seumur hidup ということができる [日本語インドネシア語大辞典、2001年]。類義語に、「人生 (kehidupan manusia/life)」がある。
- 6 アダットはマレー語の名詞で、語源はアラビア語であり、ミナンカバウなどに見られる母系制の財産相続が代表的な例として挙げられる。
